現代文讀本

下

4a
810
大11

41473
教科書文庫
4
810
41-1918
20000
80456

資料室
4a
810
大11

大正七年五月十五日
文部省檢定濟
中學校・高等女學校國語科用

永井一孝
原田鎗三 共編

現代文讀本

東京 株式會社 啓成社發兌

広島大学
教
80456
図書

緒言

國文の種類甚だ多しと雖も、現代に於て最も必要なる文章は現代文ならざるべからず。然るに、現行の中等國語讀本は、上級用に至るに隨つて、古文に屬するもの頗る多く、その思想に於ても、その文體に於ても、餘りに現代生活と懸隔せる憾あり。これ、種々の事情の已むを得ざるものあるべしと雖も、豈漫然看過すべきものならんや。余等すなはち茲に見る所あり、現代大家の篇什を蒐輯して此の書を成す。收むる所、書簡文を除くの外、各種各體の文に亙りて、成るべく清新にして、思想の高邁に趣味の

豐富なるものたらんことを期したり。幸に中學校・師範學校・高等女學校其の他同程度の學校の上級に於て、普通の國語讀本と併用せられなば、庶幾くは現代生活に最も密接の關係を有する現代文の概略に通ずると同時に、趣味の涵養、智德の啓發にも裨補する所あらんか。一に教育者諸賢の淸鑒を請ふ。

大正七年二月十一日

編纂者識

現代文讀本　下目次

四季の色……高山樗牛……一
紅椿……夏目漱石……五
眞淵と景樹……佐々木信綱……八
釣……森林太郎……一三
英雄の必須を論ず……福本日南……一八
雷雨……德富蘆花……二三
自然が暗示する宇宙の問題……成瀨仁藏……三一
燕……白柳秀湖……三六
先づ貞淑の特性を涵養せよ……石黑忠悳……三九
武藏野……國木田獨步……四四

木枯……高濱虛子……五一
十二月……幸田露伴……五二
時代の爲にせよ……三宅雪嶺……五六
一ノ谷の落城……山路愛山……五九
春のおとづれ……永井荷風……六四
修養の心得……加藤咄堂……六八

現代文讀本　下目次終

現代文讀本　下

四季の色

東帝駕を旋らして萬物漸く春ならんとするや、草木の始めて嫩芽を萠すもの、其の多くは黃なり。春漸く深くして黃は變じて綠となり、夏期に至りて深綠より次第に暗綠に移る。綠の葉を成すものは黃と靑となり。卽ち知る、春夏二季の天然は色相上、黃靑二色の消長に外ならざるを。

靑は天の色なり、海の色なり。卽ち其の標示する所の感情は深遠なり。而して深遠は知識なり。

黃は理想の色なるを以て、同時に希望の色なり。而して

純黃は其の色相餘りに抽象なるを以て、そが標示する所の希望亦餘りに不明なり。之を人生に喩へんか、猶嬰兒の呱々として聲を擧ぐるが如し。

卽ち玆に一分の靑味を加ふ、淺綠是れなり。是れ卽ち渾沌たる希望に、加ふるに若干の知見を以てせるなり。夫の柳條の淺綠を見よ。轉、人をして紅顏の少年を想はしむるにあらずや。

季は夏に入りて靑味漸く加はり、曩の淺綠なるもの漸く變じて純綠となる。卽ち是れ少年の知見漸く進み、其の希望亦漸く明確ならんとするに似たらずや。初夏の天然は正に三十歲前後の壯年なり。

靑黃二素其の均衡を保ちて玆に純綠の色を成す。之を

人生に喩へんか、理想に對する希望と實在に對する知識と兩々相調和して、最も快活なる生活を現ぜるなり。二十歲前後の人は空想に耽るを樂しみ、四十歲前後の人は實際に執著す。十歲前後の少年は單純なる理想の人たること、猶五十歲以後の老人が枯淡なる知性の人たると等しきなり。見來れば、圓滿なる人生は三十歲前後にあるか。

圓滿なる人生が三十歲前後なるが如く、圓滿なる天然は恐らくは初夏に於て求め得べし。晩夏に近づくに隨ひ、黃漸く減じて靑漸く加はる。八九月の森林は人をして幽邃の感あらしむるも、快活の情を起さしめず。理想色なる黃味の減じたればなり。下つて秋に入れば、常綠樹は暗黑色を呈し、他は卽ち漸く乾枯す。何ぞそれ枯淡なる白頭翁

と相似たる。

且それ初夏は、血氣に富める事に於ても三十歳前後の壯年に等しきなり。見よ、牡丹・芍藥・石竹・躑躅・薔薇等凡て燃ゆるが如き赤色の花は、一年中此の季を以て最も多しとするを。孟春の花は、清冷雪の如き梅花のみ、些の情熱なし。中春の花に桃花あり、櫻花あり、海棠あれども、其の色尙甚だ紅ならず、血氣に於て未だ足らざる所あり。猩々緋の如き極熱の色相は、多く五六月の間に於て之を見る。

人生の四季を觀じて之を天然に擬す、亦多少の興味なきに非ざるべし。而して吾人は信ず、天然が吾人に與ふる大なる教訓の一は、實に此の如き觀察に由來すべきことを。

（高山樗牛―樗牛全集）

紅椿

向ふ岸の暗い所に椿が咲いて居る。椿の葉は綠が深すぎて、晝見ても、日向で見ても、輕快な感じはない。ことに此の椿は、岩角を奥へ二三間遠退いて、花がなければ何があるか氣のつかない所に、森閑として固まつてゐる。其の花が！一日勘定しても無論勘定し切れぬ程多い。然し、眼が付けば、是非勘定したくなる程鮮かである。唯鮮かと云ふばかりで、一向陽氣な感じがない。ぱつと燃え立つ樣で、思はず氣を奪はれた後は、何だか凄くなる。あれ程人を欺す花はない。余は深山椿を見る度に、いつでも妖女の姿を聯想する。黑い眼で人を釣り寄せて、知らぬ間に嫣然たる毒

を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃は既に遲い。向ふ側の椿が眼に入つた時、余は、えゝ見なければよかつたと思つた。あの花の色は唯の赤ではない。眼を醒す程の華美やかさの奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。悄然として萎れる雨中の梨花には、只憐れな感じがする。冷かに艷なる月下の海棠には、只愛らしい氣持がする。椿の沈んで居るのは全く違ふ。黑ずんだ、毒氣のある、恐し味を帶びた調子である。此の調子を底に持つて、上部はどこまでも華美に裝つてゐる。然も、人に媚びる態もなければ、ことさらに人を招く樣子も見えぬ。ぽつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぽつと咲いて、幾百年の星霜を人目にかゝらぬ山陰に落ち付き拂つて暮してゐる。只一眼見たが最

後！見た人は彼女の魔力から金輪際免れることは出來ない。あの色は只の赤ではない。屠られた囚人の血が、自ら人の眼を惹いて、自ら人の心を不快にする如く、一種異樣な赤である。

見てゐると、ぽたり赤い奴が水の上に落ちた。靜かな春に、動いたものは只此の一輪である。しばらくすると、又ぽたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりもかたまつたまゝ枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のない樣に見えるが、落ちてもかたまつて居る所は何となく毒々しい。又ぽたり落ちる。あゝやつて落ちてゐるうちに、池の水が赤くなるだらうと考へた。花が靜かに浮いて居る邊は、今でも少々赤い樣な氣がする。また

落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか區別がつかぬ位靜かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだらうかと思ふ。年々落ち盡す幾萬輪の椿は、水につかつて、色が溶け出して、腐つて泥になつて、漸く底に沈むのかしらん。幾千年の後には、此の古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿のために埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。又一つ大きいのが血を塗つた人魂の樣に落ちる。又落ちる。ぽたりぽたりと落ちる。際限なく落ちる。

（夏目漱石―草枕）

眞淵と景樹

一は縣門派を率ゐて萬葉古學の頭領、一は桂園派の宗匠として近世歌壇に於ける新歌風の鼓吹者。一は學者にして歌人、一は歌人にしてまた相應の學者。その實質に於てはともかく、形式に於て、輪廓に於て相似ることが多く、而して近世國文學界の雙璧として對照せしめるに最もふさはしいのは、賀茂眞淵と香川景樹とである。

眞淵は元祿十年に生れ、明和六年に歿し、年を享けること七十三。景樹は眞淵の歿する前一年、明和五年に生れ、天保十四年七十八歲で逝いた。世にあつた年齡はほぼ同じで、一は德川の中期に生き、一はその末期に生きた。

德川時代の學者には、晩學大成した人が多い。兩者の如きも亦さうである。眞淵は遠江に生れ、三十七歲の時上京して國學の師に就き、四十二歲江戸に出でて一家を立て、五十歲以後多くの著書をした。景樹は因幡に生れ、三十歲

梅月堂 香川宣阿。周防岩國の老臣、歌人。享保二十年九月歿す、年七十八。

春滿 荷田春滿。國學四大人の一、伏見稻荷山の祠官。元文元年七月二日歿、年六十九。明治十六年二月贈正四位。

蘆庵 小澤蘆庵。歌人。冷泉爲村に學び後破門せらる。享和元年七月十一日歿、年七十九。

で香川家に入つたが、三十七歳梅月堂を離緣してから一家を立て、四十四歳以後最も活動した。而して眞淵が春滿に學んだのは、なほ景樹が蘆庵に刺激せられたが如くである。しかも眞淵が春滿ぶりの新古今にちかい歌風から脫して古風に入つたのは、景樹が梅月堂の舊歌風をすてて新歌風を開いたのに似て居る。

景樹は歌を生命とし、眞淵は歌を旨として古道にわたつた。その趣はやゝ異なつてゐるが、その道に對する强い信念と、眞率な態度と、嚴肅な自覺とに於ては、ともに同じい。たとひ、景樹には幾分の覇氣衒氣があつて、眞淵の如き清高の氣品はないにしても、その一道の先覺者を以て任じた自覺と意氣とに至つては、兩者ともに同じく後人を

新學 一卷。眞淵の著。

新學異見 一卷。景樹の著。

して景仰の感に堪へざらしめる。

而して、かくの如き兩者が、近世和歌史上相反對せる流派を率ゐて、一は他より後に出で、他を攻擊したのは頗る興味がある。景樹の眞淵に對する反對と攻擊とは、勿論彼が例の覇氣の餘りに出た嫌がないではないが、一面堂々主張の爭として近世歌壇の壯觀をなして居る。

眞淵の新學に對して景樹が著した新學異見は、最もよく後者の前者に對する攻擊的態度を示して居る。而して景樹が攻擊には、たしかに求めて異をたてたふしがある。否、大體に於て、攻めるに急で、眞に眞淵を了解せず、また了解しようとしなかつた趣がある。更にまた、景樹が歌論の根本思想は眞淵のそれに啓發せられたあとがなしとせ

ぬ。しかも眞淵が所謂「眞情」といひ、「高く直き心」といひ、「古ぶり」といふ理想と、景樹が「歌は調ぶるものなり」との根本思想とは、いづれも詩歌の根本義に對する各自獨特の體認し得た見解で、畢竟それぞれ個人的特色を有してをる二天才が、直覺力を以て洞察し感得しえた眞理である。こは暫く兩者が歌論の枝葉の相違から目を轉じて、兩者家集中の絶唱に沈潛する時、何人も之を知り得る所である。

ただし、眞淵には自ら精選した集がなくて、その家集は數種の異本となつて傳はつてをるに、景樹には生前嚴密な自選を經た桂園一枝がある。こは眞淵の爲に不幸なるを免れない。

固陋の見解は、固よりいやしむべく斥くべきであるが、

いたづらに外國文明の壯觀に眩して、祖國の偉人を忘れるのは、啻に忘恩のそしりなきを得ざるのみならず、また決して誠實の態度と稱すべきでない。眞淵や景樹や、もとよりわが國鎖國時代の一學者一歌人として、その學問的また歌人的功績は世界的を以て許しがたいが、その一道の先覺者たりし意氣と見識と人格とは、決してこれを世界的偉人に比して、甚だしく劣れりといふべきでない。偶、生れ得た時勢と社會との周圍境遇等の如き外的要素に誤られて、その實質を輕視し蔑視する如きは、決して眞に偉人を解する道でないと思ふ。

（佐々木信綱―太陽）

釣

「釣なんといふものは、さぞ退屈なものだらうと、わたしは思ふよ。」かう云つたのはお孃さんである。大抵お孃さんなんどいふものは、釣のごとなんぞは餘り知らない。このお孃さんもその數には漏れないのである。

「退屈なら、わたし爲はしないわ。」かう云つたのは褐色を帶びたブロンドな髪を振り捌いて、鹿の足のやうな足で立つてゐる小娘である。

小娘は、釣をする人の持前の、大いなる動かすべからざる眞面目の態度を以て、屹然として立つてゐる。そして魚を鉤から脱して、地に投げる。

魚は死ぬる。

湖水は日の光を浴びて、きら〳〵と輝いて横たはつてゐる。柳の匂、日に蒸されて腐る水草の匂がする。ホテルからは、ナイフやフオークや皿の音が聞える。投げられた魚は、地の上で短い特色のある踊ををどる。未開人民の踊のやうな踊である。そして死ぬる。

小娘は釣つてゐる。大いなる動かすべからざる眞面目の態度を以つて釣つてゐる。

ぢき傍に腰を掛けてゐる貴夫人がかう云つた。

「宅の娘なんぞは、どんなことがあつても、あんな無慈悲なことをさせようとは思ひません。」と。

小娘は又魚を鉤から脱して、地に投げる。今度は貴夫人の傍へ投げる。

魚は死ぬる。

ブロンド (blond) 金色の。

ぴんと跳ね上つて、ばたりと落ちて死ぬる。

單純な平穩な死である。踊ることをも忘れて、ついと行つてしまふのである。

「おやまあ」と貴夫人が云つた。

それでも、褐色を帶びたブロンドな髮の、殘酷な小娘の顏には、深い美と未來の靈とがある。

慈悲深い貴夫人の顏は、それとは違つて、風雨に晒された跡のやうに荒れてゐて、色が蒼い。

貴夫人はもう誰にも光と溫みとを授けることは出來ないだらう。

それで魚に同情を寄せるのである。

なんであの魚はまだ生を有してゐながら、死なねばならないのだらう。

それなのにぴんと跳ね上つて、ばたりと落ちて死ぬるのである。單純な平穩な死である。

小娘はやはり釣つてゐる。釣をする人の持前の、大いなる動かすべからざる眞面目の態度を以て釣つてゐる。大きな目を睜つて、褐色を帶びたブロンドな髮を振り捌いて、鹿の足のやうな足で立つてゐるのが、なんともいへないほど美しい。

事によつたら、この小娘もいつか魚に同情を寄せて、こんな事を言ふやうになるだらう。

「宅の娘なんぞは、どんな事があつても、あんな無慈悲なことをさせようとは思ひません。」などと云ふだらう。

併し、そんな優しい靈の動きは、壞されたあらゆる夢、殺されたあらゆる望の墓の上に咲く花である。

それだから、好い子、お前は釣をしておいで。

お前は無意識に美しい權利を自覺してゐるのである。

魚を殺せ。そして釣れ。

（森林太郎譯―現代小品）

英雄の必須を論ず

人間社會に尙ぶところのものは、綿々として絶えざる優化遷善に在り。一言以てこれを蔽へば、その不息の進歩にあり。何となれば、人類慶幸の增大は、托してこの中に存すればなり。この故に、社會は自ら常にこれを求めてやまず。然れども、凡衆の瞶々たる、これを欲せざるにあらずと

雖も、その智の淺薄なる、その力の微弱なる、これを求むる所以を知らず。こゝに於てか、英雄の提撕に待てり。

請ふ、試にこれを思へ。希臘の文明煥乎たりしと雖も、亞歷山大王の出づるなかりせば、彼が如く早く世界には光表せざりしならん。羅馬の國民有爲なりしと雖も、ケーザルの出づる無かりせば、彼が如く夙に富强を致しや否やを知らず。始皇一たび出でて、東方の大陸始めて一統の大帝國を形成し、太閤一たび出でて、一百餘年間の妖雲一朝にして快晴を見る。これ皆、その社會その國民の久しく庶幾して得ざりし所のものにはあらずや。

ただ帝王的・政治的英雄を然りとするのみならず、宗教的・哲學的・科學的・文學的の英雄においてもまた然り。善い

ミルネ(Milne)佛國の博物學者。一八〇〇―一八八五。

かな、ミルネの言や。曰く、「ニュートンにして、若しこの世に出でざりせば、世界は他のニュートンの顯れ來るまで、空しくそのニュートン哲學を待たざる可からざりしならん。」と。惟ふに、吾人の崇敬するニュートン出でざりしとも、一たびは必ず次のニュートンの出づる時あらん。然れども、その出づるは、五十年の後か、はた百年の後か、未だ知るべからず。その空しく待てる間は、人世の進歩を無益に停滯せしむるものなりとせば、英雄豈これを崇敬せざるを得んや。

黴菌學の大家獨逸のコッポ博士と米國の富豪カーネギーの際會に觀て、わが感興禁じ難きものあり。カーネギーは、その身貧賤より起りて、世界の一富豪となりたる者

なり。その人天性貨殖の道において、また善く萬人に傑出せり。彼は嘗てコッポ博士が醫學上の大發明を爲し、その學の上に一新時期を畫せんとするを見て、未識の博士に五百萬馬克の大金を贈與し、その業の大成に資したることとあり。明治四十一年の夏、博士わが國に來朝するの途次、紐育を過ぎりて、カーネギーを訪ひ、深く謝意を表したるに、カーネギーこれに答へて曰く、「草昧の世にあつては、最も多く人を殺したる者、卽ち英雄なりしが、今や世運文明に屬す。最も多く人を活すもの、卽ち英雄なり。予はこゝを以て、夙に博士が今世の英雄たることを知れり。故に、聊か一封を寄贈して、以て博士が研究の一端を助けしのみ。」嘗昔わが青襟の頃、また嘗て醫學に志ししことあり。當時、家

貧にして志業を達せず、中道にしてこれを廢止せり。故に、博士が事業の、生民に影響するの洪大なるを想像し得れども、その委曲を領解し、且その趣味を玩味するに至つては未だ能はず。これを遺憾となすのみ。予にして若し善く箇中の趣味までも玩味し得たらんには、贈寄、かの小額に止らざりしならん。」と。

今、この二人の事を視よ。恰も曹操、劉備の手を把りて「天下の英雄は使君と操とのみ。」といひたるに似たらずや。博士が醫學的英雄たるは、まことにカーネギーの言の如くなれども、カーネギーが世界の公善の爲に思ひ切つて善く散ずる所も、またこれ富豪的一英雄たり。

これを要するに、眞の英雄は優化遷善を求めて已まざる、この社會の「變形委員」なり。故に、その業の何たるは、われこれを問はず。生を現代に受けてなすことあらんと欲する士は、雄大崇高の理想を養ひ、これを實現せんことを努むべきのみ。

（福本日南―英雄論）

曹操 支那魏の主、字孟德、太祖武皇帝と諡す。西紀一五五―二二〇。

劉備 支那蜀の主、字玄德、西紀一六二―二二三。

雷雨

田の畔に赭い百合めいた萱草の花が咲く頃の事、或日太田君がぶらりと東京から遊びに來た。暫く話して、百草園にでも往つて見ようかと、主人は云ひ出した。百草園は府中から遠くないと聞いて居る。府中まではざつと四里、これは熟路である。時計を見れば十一時、ちと晩いかも知れぬが、然し夏の日永の折だ、行かう行かうと云つて、早晝

百草園 東京府南多摩郡七生村字百草の高丘にあり。

府中 東京府北多摩郡の町。

飯を食つて出かけた。

大麥小麥はとくに刈られて、畑も田も森も林も何處を見ても綠ならぬ處はない。其の綠の中を一條白く西へ西へ山へ山へと這つて行く甲州街道を、二人は話しながらさつさと歩いた。蒸暑い日で、二人はしば〳〵額の汗を拭うた。

府中に來た。千年の銀杏・欅・杉などの欝々蒼々と茂つた大國魂神社の横手から南に入つて、青田の中の石ころ路を半里あまり行つて、玉川の磧に出た。渡を渡つて、また十町ばかり、長堤を築いたやうに川と共に東南走する低い連山の中のと有る小山を攀ぢて百草園に來た。東京近在で展望無雙と云はれるも譌ではなかつた。西北から東南

大國魂神社　大國魂神を祀る。官幣小社。

玉川　多摩川と書く。甲斐武藏の界より出でて武藏野の南部を流れて東京灣に注ぐ。

へ青白く流れる玉川の流域から「夕立の空より廣き」といふ武藏の平原をかけて、自然の表す濃淡の綠色と磧と人の手のあとの道路や家屋を示す些の灰色とを以て描かれた大きな鳥瞰畫は、手に取るやうに眼下に廣げられた。

「好いなあ。」二人はかはるがはる景を讃めた。

やゝ眺めて居る內に、綠の武藏野はすうと翳つた。蒸暑かつた日は何時しか忘れられ、水氣を含んだ風が冷々と顏を撫でて來た。と見ると、玉川の上流、青梅あたりの空に洋墨色の雲がむら〳〵と立つて居る。

「夕立が來るかも知れん。」

「さう、降るかも知れんですな。」

二人は山を下りた。太田君はこれから日野の停車場に

夕立の……露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野のはら　太田道灌

青梅　東京府西多摩郡の町。

出て、汽車で歸京するといふ。山の下で二人は手を分つた。人家の珊瑚樹の生籬を廻つて太田君の後姿は消えた。殘る一人は淋しい心になつて、西北の空を横眼に見上げながら、渡の方へ歩いて行つた。川上の空に湧いて見えた黑雲は、玉川の水を趁うて東南に流れて來た。彼の一足毎に、空はより黯くなつた。彼は足を早めた。然し彼の足より雲の脚は尙早かつた。一の宮の渡を渡つて分倍河原に來た頃は、空は眞黑になつて、北の方でごろ〳〵〳〵雷が攻太鼓をうち出した。農家はせつせと、ほし麥を取り入れて居る。府中の方から來る肥料車はあと押をつけて、曳々聲して家の方へ急いで居る。「太田君はどの邊まで往つたらう？」彼は一瞬時斯う思うた。而して今にも泣き出しさ

分倍河原 分倍野ともいふ。北多摩郡府中の西南郊

うな四圍（あたり）の中を默つて急いだ。

府中へ來ると、煤色に暮れた。時間よりも寧ろ空の黯い爲に、町は最早火を點じて居る。早や一粒二粒夕立の先驅が落ちて來た。「此處で夕立をやり過ごすかな。」彼は一寸斯う思うたが、こゝに何時霽れるとも知れぬ雨宿りをすべく彼の心はとく四里を隔つる家に急いだ。彼は一つの店に寄つて絲經を買うて被つた。腰に下げた手拭をとつて、帽子の上からしかと頰被りをした。そして最早大分硬ばつて來た脛を踏ん張つて、急速に歩み出した。

府中の町を出離れたかと、思ふと、追つかけて來た黑雲が彼の頭上で破裂した。だしぬけに天の水槽（タンク）の底がぬけたかとばかり、雨とは云はず瀑布落しにどう〳〵と落ち

て來た。紫色の光がぱつと射す。直ぐ頭上で、火藥庫が爆發したやうに劇しい雷が鳴つた。彼はぐつと息が詰つた。本能的に彼は奔り出したが、所詮此の雷雨の重圍を脱けることは出來ぬと觀念して、歩調をゆるめた。此のあたりは、宿と村との中間で、雷雨を避くべき一軒の人家もない。人通りも絶え果てた。彼は唯一人であつた。雨は少し小降りになるかと思ふと、又思ひ出したやうにざあ〳〵どうどうと漲り落ちた。彼の頰被りした帽子から四方に小さな瀑が落ちた。絲經を被つた甲斐もなく總身濡れ浸り、ポケットにも靴にも一ぱい水が溜つた。彼は水中を泳ぐやうに歩いた。紫色や桃色の電がぱつ〳〵と一しきり、闇に降る細引のやうな太い雨を見せて光つた。ごろ〳〵、

雷がやゝ遠のいたかと思ふと、意地悪く舞ひ戻つて、夥しい爆竹を一度に點火したやうに、ぱち〳〵彼の頭上に碎けた。長大な革の鞭を、彼を目がけて打ち下す音かとも受取られた。其の度に、彼は思はず立ち竦んだ。如何しても落ちずには濟まぬ雷の鳴りやうである。何時落ちるかも知れぬと最初思うた彼は、屹度落ちると覺悟せねばならなかつた。此の街道の此の部分で、今動いて居る生類は彼一人である。雷が生き者に落ちるならば、卽ち彼の上に落ちなければならぬ。雷にうたれて死ぬる運命の人間が、地の此の部分にあるならば、其は取りも直さず彼でなくてはならぬ。彼は是非なく死を覺悟した。彼は生命が惜しくなつた。

今、此處から三里隔つて居る家の妻の顔が歴々と彼の眼に見えた。彼は電光の如く自己の生涯を省みた。其れは美しくない半生であつた。妻に對するおひめの數々が、緋の文字をもて書いたやうに顯れた。彼は此のまゝ雷にうたれて死んだ後に殘る者の運命を考へた。「一人はとられ、一人は殘さるべし。」と云ふ聖書の恐しい宣告が、彼の頭に閃いた。彼は反抗した。然し其の反抗の無益なるを知つた。雷はまゝ〳〵劇しく鳴つた。最早今度は落ちたと、彼は度々觀念した。そして彼の心は却つて落ちついた。彼の心は一種自己に對し、妻に對し、一切の生類に對する憐憫に滿たされた。彼の眼鏡は雨の故ならずして曇つた。斯うして夕暮の街道二里を、彼は雷と共に歩いた。

調布　東京府北多摩郡の町。

調布の町に入る頃は、雷は彼の頭上を過ぎて、東京の方に鳴つた。雨も小降りになり、やがて止んだ。暮れたと思うた日は、生白い夕明りになつた。調布の町では道の眞中に五六人立つて何かがや〳〵言ひながら、地を見て居た。雷が落ちたあとであらう、煙のやうなものがまだ地から立つて居た。

（徳富健次郎―みゝずのたはごと）

自然が暗示する宇宙の問題

自然はさまざまの問題を提供して、人間の注意を引きつけようとして居るやうである。予は心靜かに自然に對する時、予の頭腦の中には一物のわだかまりもなくなる。現實生活の煩瑣を脱して、知らず識らず思想の世界を辿

つて行くのである。壯美な感情、悠久な感情が、予の心の底を流れて來る。卽ち、自然は常に絶對の世界を暗示して居る。靈に於て何物かを語つて居る。予は先づ自然が提供する第一の問題を解かうと思ふ。それは自然(物質界)には生命があるかといふ問題である。

人間の身體と精神とが研究された結果、身體が働いて居る時は、精神の動いて居る時である、精神の活く時は、身體も休んで居ないといふことを知つて來たのである。凡てのものは皆力であつて、力は凡ての活きの根本である。卽ち精神は身體に移り、身體は又精神に活く――嬉しい、悲しい、痛いといふ感などが其の人々の顏色に動く。顏色の動を見て精神の動を見ることが出來る。――これは皆

意識と身體との間に起る關係である。

そこで、自然は宇宙の意識を映す身體である。宇宙の意識は自然に反映する。されば、又自然の活動は宇宙の意識である。卽ち自然の力といふはその意識の表現である。かの美しく可憐に咲く野の花にも、其處に自然の意識の表現を思はずには居られない。その形、その色は、花を以て表現する自然意識の表情である。人間はその表現を見て自然の神祕の情を受け入れ、自然は其の情を花さまざま色さまざまに表現するのである。又彼の悠久無限に見える天體も常に變化して居る。人間の眼には恰も靜止するが如くに映り、恰も花の如く見えるものも、皆其の中に動き活く力――意識――を持つて居らぬものはない。世界の萬物

は皆人間と均しく生きたものであり、生命あるものである。この生命といふは絶對不朽の宇宙の意識である。斯ういふと人々は再び考へざるを得ないであらう、宇宙の意識とは何であるか、と。

宇宙の意識とは、宇宙の本質をさして言ふのであつて、又絶對思想ともいふことが出來る。人間が自然に對する時、其の心境は清淨になる。そして其の自然の感化力は、無言の中に煩瑣な俗界との交通を隔離せしめ、人間の想像力のある限り、其の思想の翼を擴げしめ、心靈の向上する極度にまで之を導いて行く。そして誰も斯くの如き境遇に置かれる時、必ず多少(程度)何物か神聖なる感に觸れ、自らも亦神聖なるものとならざるを得ないやうになるの

である。これは初めて絶對といふものに觸れたので、卽ち絶對の思想を了解しかけたのである。今までは物質の關係といふだけの外は、何にも氣づかなかつた自分が、始めて物質以外の何物かを見、何物かを知覺し、何物かを了解することが出來た時、始めて物質のみの關係は絶對意識から言へば、極めて遠い末技であつて、寧ろ生命には關係のない一場の夢の如きものであるといふことを悟るであらう。此の夢の世界から醒めた時に、自己の實在を見出すを得るのである。卽ち物質――時間と空間とを含む――を超越した所に、不老不死の生命のあることを感得するのである。それが所謂絶對意識である、絶對の思想である。

(成瀨仁藏―新婦人訓)

燕

自分の家から約百歩、里川の水量は午後から急に增した。東北の丘から颪す烈風は、川に沿うた眞竹の藪を一吹きに押し伏せて、枝葉の礫は矢よりも早い。

午後三時、白い濁水は川緣の灌木の茂みを潛つて、蛇のやうにぢり〳〵と南瓜の畑に押して來たが、見る〳〵向ふ岸の稻田は、三反程湖のやうになつて仕舞つた。陰鬱な灰黑色の雲が簇々と繰り出して、四邊が暗澹として來たかと思ふと、細引のやうな雨が盆を覆すばかりに降りしきる。雲が斷れると雨が竭んで、天地は宛らぬかるみの氣配になる。

すさまじい川の流れに比べて、稻田に水の押し出した湖の上は靜かで、折ふし風の吹き廻しが、大きい鯉の浮くやうな波頭を立てる。見ると其の上を、一羽二羽三羽の燕が恐しい暴風に逆らつて飛んで居る。辛うじてものの一間も上つたかと思ふと、吹き下されて礫のやうに水をかすめて下流の方へ消えて仕舞ふ。けれども、不思議に其の燕は何處を廻つて來るのか、間もなく三羽となつて、かの湖の上に暴風を嘲つて飛んで居る。自分は幾度か窓によつた。燕はいつも飛んで居る。

悽愴な暴風雨の日も暮れ近くなつた。今を盛りと咲き誇つて居た岸の木槿も、濁水になかば浸され、肥料小屋も今は屋根ばかりとなつた。豪快な壯嚴な野のけしきの中

に、何とも云はれぬ寂しさ、丁度巨人の臨終を見るやうである、勇士の劍に斃れた森の妖蛇が、最後の毒焔を吐く時のやうである。

暴風雨をよそに、自分の部屋の窓の横木に、何處から來たのか、ぬれ羽の燕が三羽、いかにも親しさうに止つて居る。多分先刻のであらう。ぴつたり身を寄せて何か頻りにつぶやきながら、小さい首を傾けたり、身顫ひをして見たり、お互に羽をつゝき合つたりして居る。暴風はまだ竭まない。

噫、何たる荒涼な、悽愴な、また寂寥な天地であらう。

されど、燕よ。おゝ、燕よ。御身には親しい友がある。

（白柳秀湖―離愁）

先づ貞淑の特性を涵養せよ

明治維新以來、婦人の教育機關は次第に整備し、その智力の發育と共に、諸種の歐米思想の影響をうけて、貞淑の德に對する問題も可なり論議されたが、婦人問題も社會の大勢に從つて推移すべきものである。今度の戰爭に起つた世界的の人道問題・經濟問題乃至思想問題から、婦人の覺悟も從來よりは一層徹底しなければならなくなつた。優しいばかりで力のない柔弱や、おとなしいばかりで男子に代つて立つ程の勇氣を缺いた卑屈などは、現代に處する上から困ることが多い。理解のある強い女といつたやうな考を、今日の獨逸婦人から學んで貰ひたい。

今日の獨逸婦人は、今度の戰爭で、世界中が男女の別なく貴賤の隔てなく、一般に物價の騰貴や思想問題などで頭を惱ましてゐる中に立つて、男子のなすべき仕事を進んで引受けて、默々として働いて居る。此の獨逸婦人の働き振りは、我が戰國時代の武士の娘や妻が唯一つの犧牲的觀念によつて凝り固つて居たのとは、大分異なつてゐる。彼等は四境を封鎖され、一國を擧げて興亡に瀕する秋に臨み、父に戰死され、兄に別れ、子を彈雨の中に送つて、さうして砲彈のあら削りや、其の他の重い仕事に從事して居る。矢張り婦人としては、その日その日の生活上の仕事もあり、家計の心づかひや、子女の敎養にも手の取れるのは言ふまでもなからうが、其の中からして國家に對する

觀念や戰爭に就いての理解をもつて、「此の大戰に何う處したらいゝか？」といふ考を正當に努力的に使つて居る。これは現代の日本婦人に取つて、大いに參酌しなければならぬ事である。

併し、かういふ考も、一歩誤つては更に弊害の多いものとなる。其の弊害は第一どこから起るかといふに、貞淑の本旨を忘れる事から來るのである。私の觀る所によると、女學校その他に於ける女子敎育で、婦人の智的向上は疑もなく成功しつゝあるが、貞淑の德を養ふといふ點では憾のない譯に行かぬ。敎育上憂ふべき事として喧しくはれたのは此れであるが、事實、學問をすると、それに伴うた誇りが、往々婦人の優しい貞淑を輕んぜしめる虞があ

る。この虞は從來とても始終つき纏うて居たのであるが、今日は更に婦人の學問的智能的自覺を痛切に要する事となつたので、一層此の點に對する心配が增加した。故に私が切に希ふのは、婦人は學問技能に對する進歩向上と共に、その特性たる優しい麗はしい貞淑の德を益涵養すべく努めねばならぬことである。

然るに、現時の社會狀態を見ると、華侈の風潮が非常に勢を增して居るやに思ふ。迂つかり調子に乘つて日常の生計や習慣をかへると、その有頂天の結果は、元祿時代の再來とならぬものでもない。私は大いにそれを虞れる。今日はさうした泰平の夢に醉うて居る時代ではない。歐洲全土には、幾百萬の生靈が鮮血の流れる中に立つて、一身

一國を賭して戰つてゐる。彼等は敵も味方も或國家の人民として立ち働き、强い覺悟と美しい犧牲の精神とを養ひつゝある。戰爭の裏面に於ける麗はしい人道の花も、赤十字の旗章の下に咲き亂れて居る。一たび此の戰が收つて、平和が克復されたならば、更に〳〵混淆錯綜せる婦人問題が、政治に思想に經濟に、交紛起して來ることであらう。その時の用意は十分なりや否や？

貞淑といふ事が堅實に自己の所有となつて居るならば、いかなる混淆錯綜の渦卷が押し寄せて來ようとも、驚くに足らない。甚だ陳腐なやうに思はれる「貞淑」が、その實は最も新らしい時代に處する思想の根柢として、第一に重要な事であることを忘れてはならぬ。世界的變局の秋

に際する婦人としては、此の貞淑の德性を一番先きに堅實に養つて他の事に及ぶのが必要である。

（石黑忠悳――新家庭所載の文に據る）

武藏野

武藏野を散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば、必ず其處に見るべく聞くべく感ずべき獲物がある。武藏野の美はただ其の縱横に通ずる數十條の路を當もなく歩くことに由つて、始めて獲られる――春、夏、秋、冬、朝、晝、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただ此の路をぶら〳〵歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を滿足

さすものがある。これが實に又武藏野第一の特色だらうと、自分はしみじみ感じて居る。武藏野を除いて日本に此の樣な處が何處にあるか。北海道の原野には無論の事、那須野にもない。林と野とが能くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の樣に密接して居る處が何處にあるか。實に武藏野にかゝる特殊の路のあるのは此の故である。

されば、君若し一つの小徑を往き、忽ち三條に分れる處に出たなら、困るに及ばない、君の杖を立てゝ其の倒れた方へ往きたまへ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つて又二つに分れたら、其の小なる路を選んで見たまへ。或は其の路が君を妙な處へ導く。これは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ竝んで、其の前に少

し許りの空地があつて、其の横の方に女郎花など咲いて居る所もあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら君の幸福である。すぐ引き返して左の路を進んで見たまへ。忽ち林が盡きて君の前に見渡しの廣い野が開ける。足元から少しだら〳〵下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つて居て、雲の色にまがひさうな連山が其の間に少しづつ見える。十月小春の日の光のどかに照り、小氣味よい風がそよ〳〵と吹く。若し萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が

萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の涛には枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の涛の徑を暫くゆくと、又二つに分れる。右にゆけば林、左にゆけば坂、君は必ず坂をのぼるだらう。兎角武藏野を散歩するのは高い處高い處と選びたくなるのは、なんとかして廣い眺望を求めんとするからで、それで其の望は容易に達せられない。見下す樣な眺望は決して得られない。それは初めからあきらめたがよい。

若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はば、畑の眞中に居る農夫にきゝたまへ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見たまへ。驚いて此方を向き、大聲で

教へて吳れるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲できゝたまへ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひたまへ。鷹揚に教へて吳れる。だらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。教へられた道をゆくと、道が又二つに分れる。教へて吳れた方の道は餘りに小さくて少し變だと思つても、其の通りにゆきたまへ。突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいかぬ。其の時、農家で尋ねて見たまへ。門を出るとすぐ往來ですよ」とすげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覺えのある往來、なる程これが近路だなと、君はすぐ微笑をもらす。其の時、初めて教へて吳れた道の有り難さが解るだらう。

眞直な路で、兩側共十分に黃葉した林が四五町も續く處に出る事がある。此の路を獨り靜かに歩む事はどんなに樂しからう。右側の林の項は夕照が鮮かにかがやいて居る。をり〳〵落葉の音が聞える計り、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はず、若し其れが木の葉の落ちつくした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にがさ〳〵と音がする。林は奥まで見すかされ、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩のあわただしく飛び去る羽音に驚かされる計り。

同じ路を引きかへして歸るは愚である。迷つた處が今

の武藏野に過ぎない。まさか行き暮れて困る事もあるまい。歸りも矢張凡その方角をきめて、別な路を當てもなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀をうる事がある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黃金色に染まつて、見るがうちに樣々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖の樣な雪が次第に遠く北に走つて、終は暗澹たる雲のうちに沒してしまふ。

日が落ちる、野は風が強く吹く、林は鳴る、武藏野は暮れんとする。寒さが身に染む。其の時は路をいそぎたまへ。顧みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさうである。突然又野に出る。君は其の時、

山は暮れ……蕪村の句。

山は暮れ野は黃昏の薄かな

の名句を思ひだすだらう。

（國木田獨歩―武藏野）

木枯

室內に坐して居ると、表を吹く木枯の事は忘れて居る。唯障子の破れから吹き込んだ一枚の木の葉を見て、木枯が吹いて居たのだわいと氣が附く。ばた〳〵と鳴る裏戸の音を聞いて、これも木枯の吹きあふつたのだなと氣がつく。併し、これは大人の事だ。おもちやを持つて遊んで居る小兒は、唯疊の上に落ちた木の葉のみを見る。裏戸の音のみを聞く。木枯の事は念頭に浮ばうともせぬ。況や此の疊の上の木の葉と裏戸の音との間に、連絡があらうなど

とは夢にも思はぬ。

無邪氣な世間の人が、世間の出來事を見るのは、恰も小兒が疊の上の落葉を見、裏戸の音を聞くのに類して居る。此の落葉と裏戸の音とは、彼等に取つて別々の現象とほか考へられぬ。唯學者、世故に長けた人、苦勞人などいふものが、學問上、經驗上、思索上兩者の奥には木枯なるものが伏在してゐることを知る。小說家なども此の苦勞人の一人である。

木枯の吹き當て高き塀もあり。

（高濱虛子―ホトトギス）

十二月

限り無き世に限りを設けて、月には極月といひ、日には大晦日といひ、時迫り歲終らんとすとて、十二月に入り、三十一日に近づくより、人の心も長閑なり得ず。電車の響の地に轟きて急しきをも、猶遲しとしてもどかしがり、電話の鈴のけたゝましき呼應にものいふ聲さへ尖り勝に鋭うなるも拙しや。一年は三百六十五日、一日は二十四時、春は彌生の霞うらゝかなる折とて、人の脈の緩う搏つにもあらず、師走の空のならひ風烈しくて、鳥の羽も觸らば落ち來ん時雨の雲の險しき時とて、我が息の短う塞まるにもあらねど、花に浮かれ月に嘯きて、怠慢の日を重ね來し今、頭を回らせば、空に過しゝ曆の桝の殼の多きに驚き、眸を放てば、歩まで叶はぬ前途の山坂の路遠く、樹立暗きに

思を熬るが、こゝに至りて心いたづらに若くて、身既に古りんとする、誰しもの常なり。儛の畫いまだ成らずして、儛の墨はや少くなりぬ。吾が機猶織り餘りて、吾が燭ほとほと盡きんとす。極月に入り、大晦日に近づきての自他の感は、皆かくの如くならずや。まして女は紅顏色あざやかなるも、おもかげの變らで年の積る事なければ、翠髮匂こまやかなるも、羽子板の市を樂まんほども長からじ。二十歳過ぎては人の知らぬ恨もあるべく、三十路近くては世に喞む慍もあるべし。抗ひ難き光陰の力に、鏡中の霜の拂へども加はり、脣頭の硃の漸くに焦げて、桃李の露の曉に笑みしみづ〳〵しさは往時、楊柳の寒き烟に愁ふる凄じさの現在には、美人も才女も門松の常磐の翠を復見んとす

るに臨みて、人間の口惜しき衰の早く萌すを歎かざらんや。されど、觀るに竹は節ありて面白く、思ふに花は時ありて妙なり。流れて止まらぬ月日に、年の瀨のあるもをかしからずや。智者は惑はず、勇者は懼れずといふ。美人は老いず。老いざるにはあらず、心其の若さを失はざるなるべし。才女は衰へず。衰へざるにはあらず、氣其の冴えを失はざるなるべし。貞婦は變らず。變らざるにはあらず、意其の操を失はざるなるべし。年の瀨のあるもおもしろの人の世のさまぞと、其の瀨の立つ浪に、吾が脚の立てるところを悟り知りて、其の瀨の末の澱に、吾が身の末のさまを映し觀んも惡しかるまじ。惡みて避け得べきにもあらぬ定め無き世の定めの關の前に、わろびれ騷がでこそは有るべ

けれ、何もおもしろし、彼もおもしろしとして。

（幸田露伴）

時代の爲にせよ

時代に超出するは善し。人は此の心掛無かるべからず。而も己自らは、或時代に生命を有するもの、而して人生僅に五十、永きも百歳を出でず。己より以前の時代に現はるることを得ず、また己より以後の時代に殘ること能はず、ただ其の生を享けし時代に於て事を爲すの外なく、將時代を超出すといひて、漠然爲す所あらんとするも、終に何の得る所なけん。時代を超出するは、其の自ら心を用ゐるの大なる所、苟も事を爲すに當りては、唯宜しく其の時代

の爲にせんことを念とすべし。

前の時代には、前の時代に生れし者、相共に事を爲し、後の時代には、後の時代に生るゝ者、相共に事を爲すべし。故に己は唯己の生れし時代の爲に事を爲せば可、又必ず己の時代の爲に事を爲さざるべからず。而して己の時代の爲に事を爲すや、或事を經始し、子孫をして之を繼續せしむるの稱すべきも、己の生れし時代を顧みず、友を千歳の後に求むと稱し、何事をか爲すあらんとするが如きは誤れり。若し友を欲するならば、之を其の時代に於てすべく、其の時代に友なくば、友なきも妨げなし。何ぞ千歳の後に待つを要せんや。

千歳後の事は、千歳の後に之を爲すの人あり。たとひ千

歳の前に在りて、千歳後の事を爲し得るにせよ、そは全く餘計の事たり。千歳の後を念ひて、同時代の事を忘るゝは、時代の爲に不親切なる者にして、己の父母・兄弟及び關係の人々を忘れて、千歳未知の人に戀々たるなり。況や千歳の後は極めて覺束なき事にして、實は百歳の後さへ測り難く、十歳の後さへ必し難きに於てをや。斯くして徒に遠き後代に空想を描くよりは、偏に其の時代の爲に盡す所あるの優れるに若かず。是れ人として爲すべき最も順當の事たり。

されど、時代の爲に拘束せらるゝは不可なり。時代に先んぜんとし、若しくは時代に後れんとするは、兩つながら時代の爲に拘束せらるゝものたり。此の如く、自ら好んで時代の拘束する所となりては、到底時代の爲に貢獻し、時代の爲に自由に活動すること能はざらん。故に人は時代を超越して、而して能く時代の爲に活動するの心なかるべからず。

（三宅雪嶺―想痕）

一ノ谷の落城

賴朝の範賴・義經を西上せしめたるは、獨り義仲を討たんが爲に非ず、義仲及び平氏の勢力を破壞せんが爲なりき。何となれば、當時平氏は殆ど全く瀨戸内海の海權を握り、一ノ谷に城郭を構へ、其の勢漸く帝都に迫るものありたれば也。是より先、平氏は去年（壽永二年）閏十月朔日を以て大いに義仲の兵を水島に破り、同十一月二十九日を以て更

水島 岡山縣淺口郡柏崎村の地なり。

室山 兵庫縣摂保郡室津村市街の背後に在り。

行家 源爲義の第十子。

に行家の兵を室山に破りしより、兵勢大いに振ひ、一たび義仲・行家の爲に失ひたる備前・播磨を恢復し、勢漸く京都に迫れり。義仲が賴朝の兵漸く攻め上らんとするを恐れ、平氏と速和せんと欲し、使者を屋島に遣はしたるは此の時に在りき。思ふに平氏も亦義仲と和するを以て得策なりとし、彼此の間には自ら意思の疏通したるものありしならん。かゝりしかば、平氏は今年(元暦元年)正月の初旬に於て始めて福原の舊都に還り、尋いで二十六日を以て安德天皇を屋島より福原に遷し奉り、大いに戰備を修めて瀨戸内海沿岸の兵力を集め、數萬騎に及ぶことを得たり。

當時平氏の内海に於ける活動は、眞に目覺ましきものなりき。則ち備中下道は内海の要港たるを以て、平氏は平

義嗣、義久 共に爲義の子なりといふ。

沼田城 沼田尻に在り。

教盛を主將とし、此の地を扼したるに、讃岐國の在廳等にて源氏に交通するものあり、兵船に乘り京都に赴かんとして此所を過ぐ。教盛則ち子息通盛・教經をして之を迎へ擊たしめしに、在廳等は淡路に遁れ、淡路の源氏、淡路冠者義嗣・掃部冠者義久と共に城郭を守りたり。教經・通盛之を追擊し、義嗣を斬り、義久を虜にし、首を獲ること一百三十二級に及ぶ。此の時、伊豫の河野四郎通信は、猶源氏方なりしかば、淡路の大勝の後、通盛・教經は更に伊豫に渡り、通信を攻めしに、通信は平氏の勢敵し難きを知り、安藝國沼田の城に走りて、伯父沼田太郎に依る。通盛・教經之と戰ふこと一晝夜、沼田氏力盡きて出で降る。

河野通信は沼田の城を遁れ出でたる後、豐後の源氏方

たりし緒方三郎惟義・臼井次郎惟隆と共に、水軍を合して備前國今成の城に據れり。教經則ち更に之を攻めしかば、源氏方の兵船は此をも亦守ること能はずして、河野は伊豫に遁れたり。

然るに、此時、淡路の豪族、安摩六郎宗益と云ふもの兼て義嗣の黨なりしが、其の黨與と共に竊に京師に上らんとしたり。教經之を聞きて海上に待ち設けたりしかば、宗益は進むことを得ず、退いて船を吹井浦に泊し、源氏黨たりし紀伊の豪族園部兵衞重茂と共に兵を合して上京せんと計りしに、教經又紀伊に至りて之を破り、首を獲ること三百六十級に及ぶ。

是れ皆安德天皇福原還幸以後の事にして、平氏の瀨戸

吹井浦 大阪府泉南郡なる今の深村。

内海に於ける勢力の盛なりしを見るに足るべきものなり。かゝりしかば、源氏は容易に兵力を以て一ノ谷を取る能はざるを察し、先づ院宣を以て和平の議を通じ、平氏の油斷に乘じ、二月五日の夜に於て、義經は丹波路より進み、急に三草山の西麓に陣したりし資盛を襲うて之を取り、範頼は播磨路より進みて昆陽に陣し、同六日一ノ谷の包圍を全うし、同七日寅時より合戰を始め、翌八日正午に至りて遂に一ノ谷を陷れたり。

此の役、平氏は全く源氏の爲に不意を襲はれたるものなれども、而も善く源氏を拒ぎ、戰鬪正に十時間の長きに亙り、通盛・忠度・經正・敦盛・知章・經俊・業盛・盛俊等の諸將戰死し、重衡は虜にせられ、宗盛以下は安德天皇を奉じ、再び兵

三草山 丹波、播磨、攝津の界にあり。

昆陽 兵庫縣河邊郡なる今の稻野村。

船に乘りて屋島の行宮に還れり。而して義經は同月九日を以て京都に凱旋し、範頼も亦間もなく歸京し、同十三日平氏戰死者の首を獄門の樹に懸けたり。斯くの如くにして平氏は、再び福原の根據地を失へり。（山路愛山―源頼朝）

春のおとづれ

楓の根元には、去年刈り込んだ野菊と薄の切株が、絹絲で繡取りでもしたやうに際立つて、黑い土の上に綠の若芽を出してゐる。椿の硬い厚い葉は、陶器の表面のやうに輝いてゐる。櫻の木は針のやうに尖つた枝の先に、其の色も其の大きさも丁度小豆粒程の蕾をつけてゐる。―仔細に私は目のとどく限り、朝の雨に化粧した庭の樹木を見

廻してゐると、空は曇つたまゝ薄暗いのに、何處から漏れて來るとも知れぬ薄い日の光がぽうつと流れ渡つた。冬であるならば、こんな薄い日の光では大きな家屋の影さへ描かれまいのに、庭中の樹木は直樣その細い絲のやうな小枝の影までを、はつきり餘す處なく濕れて、平かな土の上に横たへた。見て居る中に、日の光が次第に强く明るくなるにつれて、濕れた土地は薪か何かで底の奥から燃されるやうに、白い水蒸氣を立てて乾きはじめる。私は珍しい此の現象に、いよ〳〵興味を覺え、食事もせずに緣側に腰を下して、卷煙草に火をつけようとした。するとマッチは幾度すつても、何處から流れて來るとも知れぬ風のために、煙草に火のつく間を待たず吹き消されてしまふ。

私は首をあげて訝し氣に庭を見たが、細い楓の枝すら少しも動かず、いづれの樹木も一齊に朝寢の自分と同じやうに、如何にも太儀らしく靜止してゐるのである。漸くにして、非常に高い樫の梢のこまかい葉が、日の光にちらちら動搖して居るのを認めたばかり。私は掌をかざして、もう一度マッチを擦つて見た。小さい焰は掌の陰ながらに矢張り激しく動搖するので、私は初めて今朝の空氣全體が、風と名づけられて枝を動かすほどに强くはないけれど、如何にも廣く大きくゆるやかに動いてゐるのだと心付いた。

あゝ、凡ての物がこんなに軟かく、こんなに優しく見えるのは、眼にも見えず、物をも動かさず、つゝしみ深い女の

息のやうに通ふこの風の力であらう。私は、暖室法の不完全な日本の家の冬中、火鉢のそばに身を堅く折り敷いて居た兩足をば、今日初めて長々と緣側の置石の上に踏みのばし、それと同時に、如何なる時も深く懷中にさし込んで居た片手をば、後ろについて身を支へさせた。

鶯は私の目の前の楓の木にとまつて、長い尾を敏活に振りながら、今は聲を惜まずに鳴きつづける。雀は庭中の枝に囀り、雞は何處か近くの家で頻りに時をつくつて居る。植込を隔てた勝手の井戸端では、高話しながら下女共の笑ふ聲が、如何にも他愛なく聞える、と同時に、出入の商人があける裏門の鈴の音、往來を通る物賣の笛、何處かで囃す遠い太鼓の響までが、皆一緒になつて、空模樣の次第

に晴れ、日の明るくなるにつれて、冬には聞かれぬ澄んだ強い響で、私の耳に傳はつて來るのであつた。けれども、私は不思議な程、其等雜多な物音――鳥の歌、人の聲、場末の街の物音をば、不調和に感じなかつた。丁度廣大な音樂堂で管絃樂が演奏される前、幾多の伶人が幾多の異なつた樂器の調子をば、各自勝手に調べて居る時、其の不調和な響が、演奏を待つてゐる聽衆の心には、時として演奏される曲よりも却つて深い空想を誘ふ――それと同じやうな心がするのであつた。

（永井荷風――春のおとづれ）

修養の心得

一　行動の要義

人の世に處する、自己のみの存在にあらずして、社會の一員として他と共同の生活を營まざるべからず。されば、事を行ふも亦唯自己のみを標的とせずして、他と相容れ、相助け、妄りに他を損し、他を害することあるを許さず。其の甚だしく他を損害するものは、國家、法律を設けて之を制裁し、其の毫も世を益し人を利するの思想なきものは、社會、之を擯斥して共同の人たるを許さず。自己の行爲を以て法律に觸れざらしむるを限度とし、法の規定せざることは、如何なる罪惡も之を敢へてして憚らざるものを進律的生活とす。蓋し未だ上乘のものにあらざるなり。更に進んで、法律のよし規定する所あらずとも、社會の認め惡となすことは之を避け、社會の認めて善となすこと

は之を努むるに至つて、初めて社會的生活の徒と名づく。然れども、これ唯社會を標準とせるもの、人の毀譽に心を勞し、褒貶に思を碎くのみにして、眞に誠心誠意、共同生活に資するものにあらず。時人非とするも、自ら信ずる所は之を行ひ、世之を毀るも、自ら可とする所は進んで憚らず、毀譽に屈せず、褒貶に臆せず、一言一行、良心の制裁に仰ぎて、初めて俯仰天地に耻ぢざる行動を敢へてするを得べし。人を相手とするものは、人の爲に衒ふ所あり。人の爲に衒ふ者、豈大丈夫のことならんや。人を相手とせず、天を相手とす、これ吾等が行動の要義たらざるべからず。

二　修養の根柢

自己をして唯自己たるに止まらしむる勿れ。常に社會

の一員たるを自覺せよ。唯社會の一員たるを自覺するに止まること勿れ。常に天地の化育を助け、宇宙の理想を實現するの職責あるを思へ。これを思ふ時、我は唯社會の一員として、其の共同生活を助くるのみならず、又實に其の進歩發達に貢獻すべき任あるを覺らん。此の自覺は、實にこれ世に處し、事を行ふの根柢たり。修養の義や多端、其の法や千差なりと雖も、要は人をして、先づ此の自覺を得しむるにあり。吾等の世に處するや、單に吾等が生存の爲にあらず。吾等の事を行ふも亦唯社會の共同生活を助くるのみならず、實に天地の化育を助け、其の進歩發達に貢獻するにありと知るの時、我は是れ一個の小天地、我が行動は直に宇宙に繫る。其の任重く、其の責大なり。其の責大な

るが故に、智能の啓發一日も廢すべからず、其の任重きが故に、趣味の向上も亦忽にすべからず。而して之を行ふに當つて、意志の鍛錬は、又實に其の必要を逼り來る。否、啻に智能の啓發、趣味の向上、意志の鍛錬といふが如き精神的方面のみならず、身體の壯健も亦吾等の企圖せざるべからざる一大要件たり。

三　靜中の修養

吾等は吾等一人存在するに非ず。其の任重く、其の責大なり。此の身、擅に棄つべからず、此の時、徒に過ごすべからず。醉生夢死は社會の罪人たり。一日生くれば、以て一日世を益し、一月生くれば、以て一月人を利す。身體の衞生の怠るべからざるや言ふを待たず。精神の方面に於ては、此の

自覺を妨げんとする情慾を征服して己に克つの工夫、これ修養の靜的方面なり。此の靜的方面に於て、吾等は古聖先賢の教示によりて、靜坐冥想の頗る功あるを思ふ。一室人なく、靜かに自己、自己を見る。妄念息みて、情慾其の影を潜め、心裏の祕奥に、別に天地と脈絡貫通する所のものあるを認むるに至つて、五尺の短身、直に宇宙と同化し、我が智識は統一せられ、我が趣味は向上し、我が意志は動かすからざるものあるに至らん。蓋し靜坐冥想は吾等が忘るべからざる修養の工夫なり。靜坐冥想裏、如何か工夫すべき。他なし、思索して其の本の一なる所に至るにあり。宇宙の現象や千差萬別、其の千差萬別なる所に心を注ぐが故に迷ふ。迷ふが故に心動く。心動くが故に煩悶あり、懊惱

あり、左顧右視して寂然不動の境地に入る能はず。唯夫れ其の本の一なるを見よ。生死苦樂、畢竟一、善惡邪正、其の本異なるなし。觀じて此に至る、何の不安かあるべき。これ靜中修養の捷徑なり。

四　動中の修養

靜中の修養は、之を動處に用ゐ來つて、初めて其の功を見る。宇宙の萬象、其の本一なりと雖も、其の相や千差萬別、其の千差萬別なる所に對して、應用無礙なるを得るに至る、之を動中の修養といふ。靜中の修養は、靜坐冥想に於て得べきも、動中の修養は、日常百般の事務に鞅掌しつゝ、しかも心を一境に懸け、雜然紛然たる中に立ちて、毫も其の心を動かさざること、恰も明鏡の歷々として萬象を寫し

て、一點の汚染を受けざる如く、異中に同を見、同中に異を察し、自己の職業を以て、直に宇宙の大道に貢獻すべきものなるの理を覺り、人に接し、世に交りて、其の守る所を失はざることに注意し、毀譽に動かされず、褒貶に移されず、自己の生活をして意義あらしむるの活動を試みるを要す。書を讀んで古人修養の跡を考ふるも其の法たり、多くの人に接して世態人情を觀察するも其の法たり、自己の職業に精通して趣味を感ずるに至るも亦其の法たり。

五　人生の任務

靜動二面の修養によりて自己を實現し、靜かに本來の性を觀じ、動いて社會に貢獻するは修養の眼目たり。されば、人は自己に對する任務と、他に對する任務とを有す。自

己に對するものに三あり。曰く自訓、曰く自護、曰く自制。自訓とは、自ら現代の人として耻ぢざる底に智能を啓發し、有くことなり。自護とは、自ら自己の心身を護りて、內は自己の人格を尊重し、外は社會に對する任務を怠らざるにあり。自制とは、自己の情慾を制して放恣ならしめざるにあり。他に對する任務を分ちて三とす。家族に對する務、國家に對する務、社會に對する務これなり。家族に對するは、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和するにあり。國家に對するは、常に國憲を重んじ、國法に遵ひ、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるなり。社會に對するは、公益を廣め、世務を開くなり。これ人生の任務なり。されど、尙更に大に、更に大なるものあり。之を宇宙に對する任務とす。人を相手とするの

任務は、時に皮相に流れ、外見に失するを免れず。人を相手とせずして、天を相手とするは、これ我が行をして、天地の化育を助け、宇宙の理想を實現せしめんとするにあり。至誠こゝに湧き、至情こゝに出で、行に表裏なく、心に羞耻なきを得ん。かくて、人生の任務は完全に行はれ、生存の意義も亦充實せしむるを得ん。

（加藤咄堂）

現代文讀本 下終

大正七年三月九日印刷
大正七年三月十二日發行
大正七年五月八日訂正再版印刷
大正八年一月三日訂正再版發行
大正十一年三月九日四版發行

現代文讀本奥付 上、下各
定價 金貳拾錢
大正十一年度臨時定價 金參拾八錢

編者 永井一孝
編者 原田鎗三
東京市神田區三崎町三丁目一番地
發行兼印刷者 株式會社 啓成社
右代表者 布津純一
東京市牛込區新小川町一丁目九番地
印刷所 成田印刷所

不許複製

發行所 東京市神田區三崎町三丁目一番地 株式會社 啓成社
電話 九段 二四七四番
振替東京 一二〇五五番